

吉祥院六齋 の歴史を 紐解く



吉祥院地域の歴史 菅原清公
Sugawara no Kiyokimi

吉祥院の地名の由来は、1200年前（804）菅原道真の祖父清公が遣唐使として、唐へ渡る途中、嵐に遭遇し、舟が転覆寸前に「吉祥天女」に平安を祈ったところ空中に「吉祥天女」が顕れ、一瞬にして暴風が静まったといわれています。清公は、この感激と喜びを胸に無事帰国した謝恩のため一堂を建立し、吉祥院と称されたのが、いつしか地名として通称されるようになりました。吉祥院地域は、西に桂川が流れ、東は西高瀬川に囲まれ、古くから農業が盛んに営まれ、美しい水は吉祥院地域の自慢の一つでした。その反面、幾度となく水害にみまわれてきた地域でもあります。1931年（昭和6年）に、吉祥院村から京都市に編入後、土地区画整理事業や都市基盤整備が進む中、1960年代以降「高度経済成長期」に入ると、豊かな美しい田園地帯が大きく変貌します。大部分の農地が宅地になり、住宅やマンションが建ち並び、工場や大型商業店舗の進出によって、かつての農村地域は都市化に移り変わっていきます。1965年と2000年の土地区分を比較すると、南区全体に占める農地の割合は約47%から約10%に減少し、住宅地は約10%から54%に増加しています。

吉祥院地区内に旧家が多かったことから、六齋念仏に関する古い資料などが多く残っていました。起源には、平安時代に空也上人が始めたとされる踊躍念仏が起こりとされています。



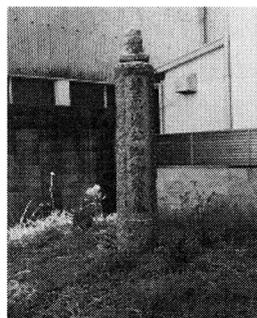
吉祥天女



西片里紗

清水美優

ますが、どのような歴史を経て現在のような念仏になったのかを正確に裏付ける資料は存在しません。その歴史を紐解く上で手がかりとなるのが、江戸時代中期、現在の「六齋念仏」と呼ばれている芸能が成立していました。仏教では、毎月8・14・15・23・29・30を六齋日とし、この日は悪鬼が勢い出て人々に災いをもたらすとされ、太鼓を打って念仏を唱えることから六齋念仏と称されるようになりました。後に六齋念仏は変遷し、念仏踊を主とする念仏六齋系と、能や歌舞伎の演技を取り入れることで娯楽性に富んだ芸能六齋系の二系統に分かれ伝承されました。現在、京都市内に15箇所伝承され、それぞれ独自の特色を持ち、演目にもいくらかの違いはありますが、千年近く続く伝統の誇りと、厳しい稽古が生み出した民衆自身の芸能ということが共通しています。



道真公の祖父菅原清公の墳墓が「吉祥院稲葉町」にあり、「おこり山」と称して立入を禁じている。承和9年（842）10月17日72歳で没す。

祥栄小学校東側、京菓司「満月」吉祥院工場とガレージの間に「菅原清公卿御墳墓」の石碑がある。

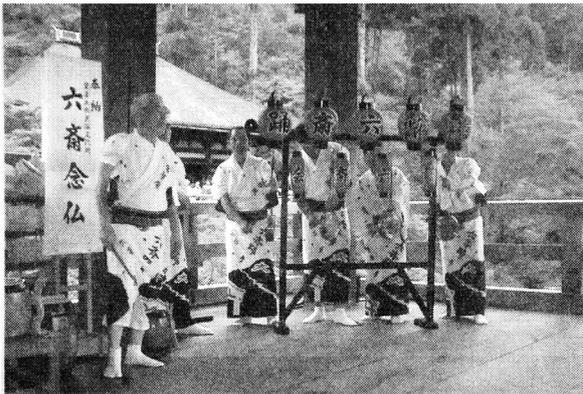


山崎の合戦

京都の三大祭は、祇園祭・時代祭・葵祭が代表されますが、六斎念仏は、どちらかと言えば町衆の祭りで、当時の農民や庶民にとっては三大祭よりも親しみやすいものでした。

六斎念仏が吉祥院の地に伝わったのは、平安時代後期、吉祥院天満宮の祭礼に獅子舞を奉納したことに始まります。

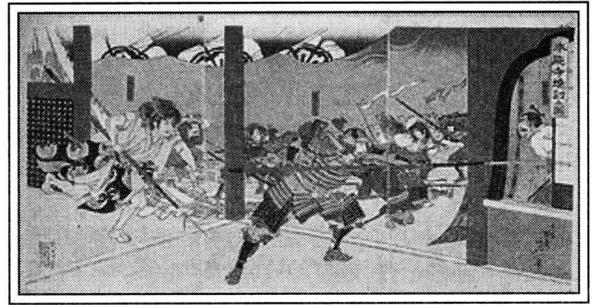
吉祥院地域の伝統文化として根付き、現在に至るまで継承されています。



清水寺六斎奉納 2003（平成15）年8月17日

このように、吉祥院地域で六斎念仏が伝わるとされる平安時代後期頃に、氏子が氏神である吉祥院天満宮の祭礼に、獅子舞を奉納したのが始まったといわれていますが、もう一つの説では、1582（天正10）年、本能寺の変で織田信長を自刃させた明智光秀と「主君の仇討ち」を大義名分に揚げた豊臣秀吉との天下分け目の戦い、いわゆる、豊臣秀吉と明智光秀のかの「山崎の合戦」において、豊臣勢に敗れた明智勢の残党が、吉祥院の地まで敗走し、討たれ息絶えたのを村の人らが弔ったのが起こりと伝えられています。

少し時代的な隔たりがありますが7月15日の「盂蘭盆うらぼん」というのは「死者を弔い、現世に生きる人々には、その行事を通して楽しみを与える日」とされていることから、吉祥院天満宮に獅子舞を奉納することで、盂蘭盆の死者への弔いが結合して六斎念仏が行われるに至ったと考えられています。



「本能寺焼討之図」（明治時代、楊斎延一画）

豊臣秀吉が1554年から仕えていた織田信長は、1582（天正10）年6月2日に京都にある本能寺で明智光秀の謀反により命を絶たれます。

これがのちに本能寺の変と呼ばれる出来事で、これが秀吉の運命を大きく変えることになります。信長の死を知らされたとき、秀吉は高松城を水攻めしている最中でした。秀吉は毛利輝元に、高松城の城主である清水宗治の切腹を条件として和平案を持ちかけ、引き連れていた軍を京都に帰します。秀吉はまず摂津で、高山右近、池田恒興、中川清秀の軍と、続いて堺で織田信孝、丹羽長秀の軍と合流します。そして自らの軍とあわせた軍勢を率いて京都へと急ぎ、6月13日に山崎で明智光秀の軍と戦い、圧倒的な軍勢で光秀の軍を破り、光秀は落武者狩りで討たれてしまいます。この戦いは「山崎の戦い」といわれ、秀吉はこの功績から、強い発言力を持ち、織田家の後継者として選ばれた織田信秀の後見人として君臨することになります。



京都市交通局人権フィールドワーク自主研修
六斎の歴史について報告。2012. 6. 30
（写真左：西片里紗 右：清水美優）